

大学図書館に未来はあるか？

土屋俊(千葉大学)

平成18年度公立大学協会図書館協議会研修会
(2006年7月27日 大阪府立大学学術交流会館)

日本の大学を取り巻く状況といわれているもの

- 少子化への対応
 - 同世代人口 × 進学率 ≤ 入学定員
- 直接的な社会還元へのプレッシャー
 - 研究成果 ⇒ 知財、特許等々
 - 教育活動 ⇒ 生涯学習支援、図書館市民開放等
- 国際的競争力への要請
 - (「10万人計画」達成後の)留学生像の変化
 - 研究人材資源の「空洞」化？
- 情報化？
 - いまや遅れの象徴(10年前は時代の先端だったが、)

でも、そんなに大げさではなく、

- 本来の大学教育が求められている
 - 高等教育の本来の目的 ≠ (かつての) 高度職業教育
 - 日本の近代化のための人材養成からの離脱
 - (かつて) 入試による選別 ⇒ 教育対象者の均質化
 - (かつて) 教室による隔離・教科書中心の学習
 - **学生の学習能力の育成**
 - 知識のライフサイクルが短い知識社会における自己学習能力の必要性
- 本来の学術研究が求められている
 - 輸入的な学術活動(近代化人材養成教育からの要請?)からの脱却 ⇒ **自分の考えを展開すること**
 - 学問の「有用性」に関する金銭文化との微妙な関係
 - 知識は力?(好奇心駆動から問題解決へ)

大学図書館に期待されていること

- 実は現在、なにも期待されていないのかもしれない
 - 学習図書館としての絶対的整備不足：
 - 図書館リピーターはそんなにいない(2割、3割、、、)
 - 試験のときだけは満員
 - 「シラバスに載っている参考書がない」
 - 研究図書館としての主体性の未確立
 - 「本当に必要な本は、研究室においておく」
 - 「雑誌論文はILLに出したほうが探さないでよく楽」
 - これらは大学の「金と人」で整備するべきものなのに大学は拡充してくれそうもない

しかし、大学は本当に整備できるか？

- 大学の意思決定が教員によって行われているとすると、図書館は整備されない、なぜなら、
 - 所詮日本の教員の大半は「図書館員」であったから図書館を整備する金があれば、自分が使う
 - 教員に、効率的な「人と金」の運用は無理
- 大学の意思決定が行政職員によって行われているとすると、図書館は整備されない、なぜなら、
 - 文系人間に現代の研究と(学習)の実態はわからない
 - 「本」のイメージが古すぎる
 - 「情報化」ができない。ワークフローを変えない情報化に終始

大学そのものは大学を変えられるか？

- 教員の「カリキュラム」論議はまず不毛
 - なぜ教室が必要なのか？が不問
 - なぜ教員が必要なのか？が不問
 - なぜ授業が必要なのか？が不問
- 「研究」について、
 - 情報と金の流れがわかっていない
 - 「論文を書かなければ、雑誌価格は上がらない」という単純な理屈すらわからない
 - 「間接経費」の意味を理解していない

したがって、あるいは、つまり

- 日本の大学図書館は、日本の大学にある限り、その本来の役割を果たしえない
- なぜならば、日本の大学は大学として21世紀に求められている課題を果たしえないし、たとえ果たそうとしても、そこでは図書館の役割は理解されていないから
- となると、
 - 日本の大学を変えるには図書館は何をすべきか
 - 図書館を変えるには図書館は何をすべきか

図書館の課題

- 学生と第一線で接する資料専門家としての貢献
 - 学生の生活実態はどこにあるかを把握し、訴える
 - 学生の学習実態を知り、普遍化する
- 学術コミュニケーションにおける情報化の先駆者としての貢献
 - サイトライセンス契約・バンドリング契約・コンソーシアム交渉についての成果と知見を伝える
 - 知的創造のインフラの変化を大学で実現する
 - 大学の知的成果物の発信拠点となる

学生の生活(個人的印象)

- 本は読まない
 - ともかく子供のときから本は読まない。しかし、図書館の人(=本好きの人)がそれを理解できないらしい
- 教科書は読むらしい(教科書って、読むもの?)
 - 授業にはよく出る。最小限の知識獲得で生活する
- 飲食習慣
 - 教室内でのペットボトル、図書館での水分補給
- メールはもちろん携帯
 - パソコンでメールなんて信じられない

学習(個人的印象)

- 世界的傾向として、GoogleにはじまりGoogleに終わる学習が一般化
- その意味で、インターネットは常識以前
 - 「情報リテラシー」教育という錯覚。「できない人が教える」という英語教育の二の舞？
- 「教えられる」を待つ姿勢
 - だから授業に出るのかもしれない
 - しかし、文科省審議会は「自分で学べるように」といっていなかっただろうか
- ここを変えないと、たぶん日本の大学教育は崩壊

電子ジャーナルのインパクト

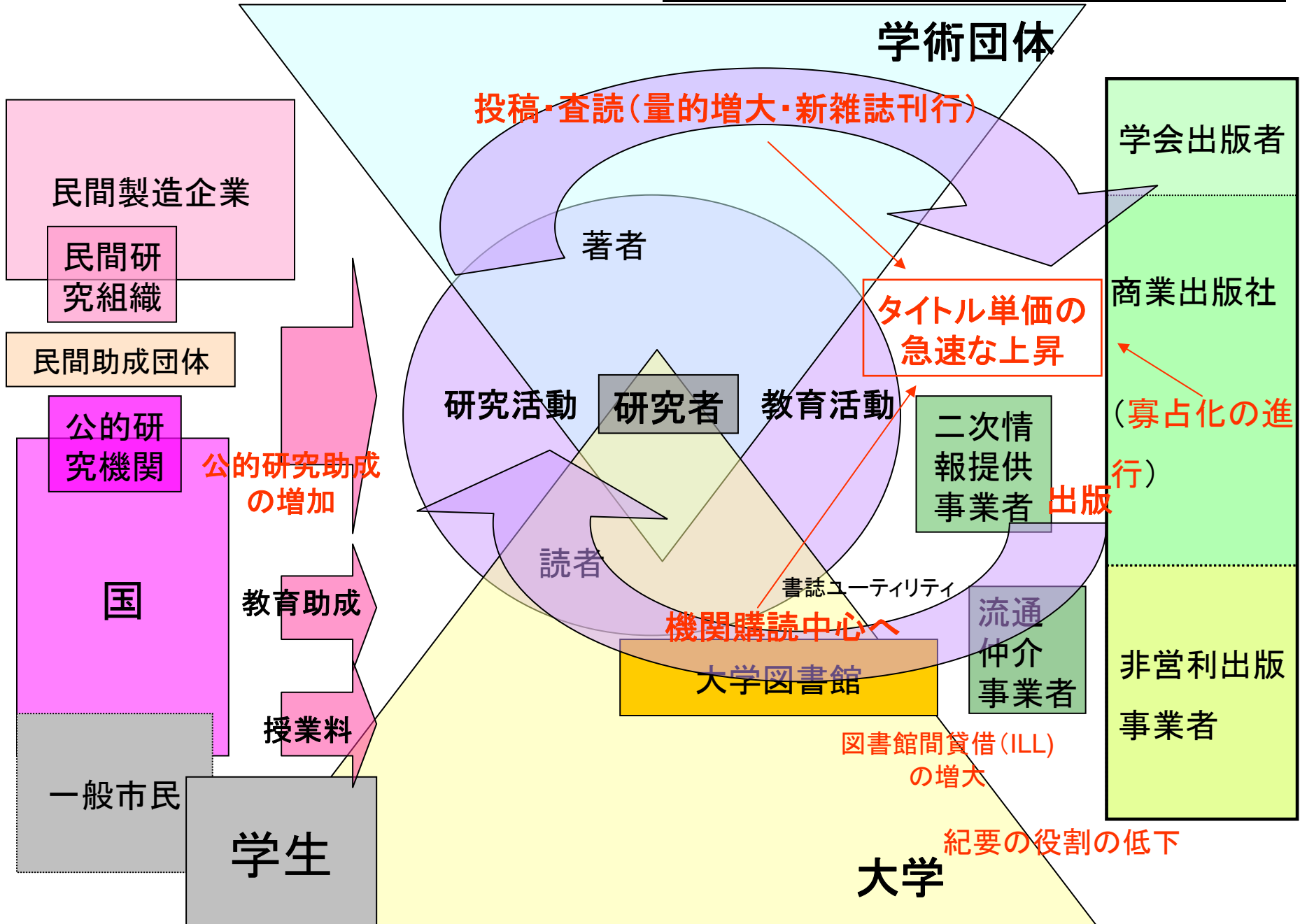
- 国立大学の経験
 - 2000年には各大学とも雑誌の危機
 - そのとき脅威にみえた「電子ジャーナル」が実は救いの手であった
 - サイトライセンス・バンドリング・コンソーシアムの経験
- インパクトの内容
 - コレクション概念の変化：所蔵から使用許諾へ
⇒ 図書館の空洞化
 - 粒度の変化：冊子から論文・チャプターへ
 - サービスの変化：参考調査からナビゲーションへ

複写依頼されたタイトルの推移:外国雑誌 ⇒ 国内雑誌

その変化は2002年(電子ジャーナル導入経費実施の年)から顕著

1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
Nucleic a Oncogen	Nucleic a Gene	Nucleic a Gene	Nucleic a Gene	Biochimic Gene	Biochimic Gene	Biochimic Gene	Anticancer	Anticancer	日本精神	日本精神	日本精神
Oncogen	Nucleic a Gene	Gene	Gene	Gene	Gene	Gene	Gene	Gene	Annals of	Annals of	Ann N Y
Genomics	Biochimic	Biochimic	Oncogen	Anticancer	Annals of	Annals of	Annals of	Annals of	Biochimic	Anticancer	老年精神
Journal o	Gene	Gene	Oncogen	Biochimic	Nucleic a	Oncogen	Advances	Neurorep	日本精神	母性衛生	母性衛生
FEBS lett	Ferroelec	Genomics	Genomics	Advances	Gene	Gene	Gene	Langmuir	Neurorep	Biochimic	日本看護
Gene	Gene	Genomics	FEBS lett	Neurorep	Oncogen	Advances	American	Journal o	看護教育	老年精神	日本公衆
Brain res	FEBS lett	Tetraedr	Human m	Genomics	Neurorep	Electroph	Electroph	Proceedir	小児保健	小児保健	日本公衆
Biochimic	Human m	Neurorep	FEBS lett	FEBS lett	Current b	Neurorep	Gene	Gene	Analytical	日本公衆	Anticancer
Analytical	Proceedir	Brain res	Proceedir	Neurorep	Nucleic a	Tetraedr	Tetraedr	日本公衆	看護教育	看護教育	日本老年
The EMB	Journal o	American	The Journ	Annals of	FEBS lett	Journal o	Proceedir	The journ	日経ア一	カウンセリ	日本看護
Annals of	The Journ	The Journ	Anticancer	FEMS mic	Journal o	FEBS lett	American	Langmuir	日本看護	Proceedir	Anticancer
Chemical	Brain res	Human m	Tetraedr	Current b	Genomics	Journal o	Journal o	Journal o	The journ	Langmuir	学校保健
The Journ	American	Proceedir	Annals of	Chemical	American	Biochemi	Analytical	老年精神	Journal o	日本看護	作業療法
The Journ	Analytical	European	Brain res	Proceedir	Brain res	Analytical	Advances	Tetraedr	Advances	日本老年	Fourth ge
Biochemi	Tetraedr	Tetraedr	American	Somethin	Electroph	Langmuir	Journal o	The Journ	精神科治	Neurorep	精神科治
Thin solid	Molecular	Annals of	Thin solid	Brain res	The Journ	Nucleic a	Molecular	Biochemi	Langmuir	Chemical	Journal o
Human m	Annals of	Chemical	European	The Journ	Proceedir	Molecular	FEBS lett	母性衛生	Tetraedr	日本心理	健康心理
Molecular	Journal o	Thin solid	Advances	Tetraedr	Molecular	The journ	老年精神	Advances	Proceedir	Oncogen	日本がん
Journal o	European	The EMB	The Journ	Human m	Human m	Journal o	The journ	Journal o	Current b	The Journ	看護教育
American	Chemical	Neuron.	Chemical	American	Journal o	Genomics	Biochemi	Current b	Neurorep	Journal o	思春期学
European	Biochemi	Ferroelec	Molecular	Thin solid	Journal o	Proceedir	日本精神	Journal o	Analytical	Biochimic	Langmuir
Surface s	Advances	Journal o	Journal o	European	Genes &	Chemical	Journal o	Tetraedr	Synthetic	Advances	Biochimic
Journal o	The EMB	Synthetic	Tetraedr	Journal o	Carcinoge	The Journ	Journal o	大阪毎日	Journal o	精神科治	日本心理
Neuron.	Neuron.	Molecular	Current b	Journal o	Analytical	Carcinoge	The Euro	日本看護	Tetraedr	Journal o	Journal o
Tetraedr	Neurorep	Advances	Genes &	Analytical	The journ	Current b	Internatio	カウンセリ	Journal o	Journal o	小児科臨

商業化の進行と価格の上昇による機能不全



キャンパスの情報化

- インフラとしての学内ネット／インターネット
 - 費用は誰が払う
 - 学生の自宅のほうがもっと情報化
 - すべての資料が電子的に
 - 事務文書の電子化
 - それでも、紙を配る教師たち。とはいえ、PowerPoint プレゼン授業は本当に学生のため？あとで見られるようにするにはどうするのか
 - カット＆ペーストのレポートの氾濫
- ⇒ ちぐはぐな情報化の現状 ⇒ 根本的見直しが必要

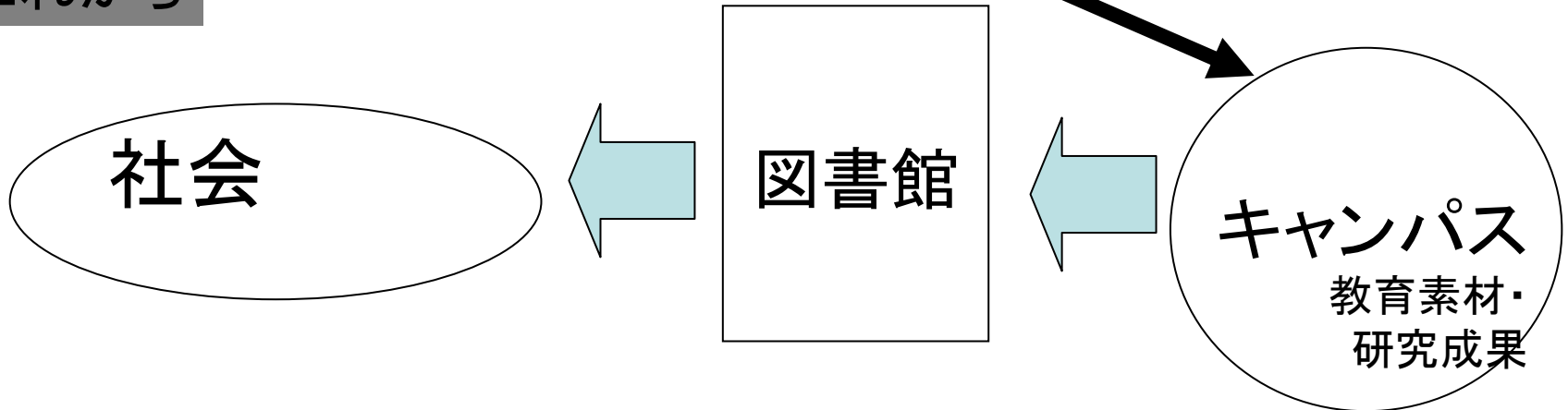
「コレクション」のベクトルの変化

これまで



デジタル化によって
直接の提供になる

これから



機関リポジトリの本質(内側からのコレクション構築)

「機関リポジトリ」とは何か

- 機関の責任において設置され、運営される
- 機関の資源によって設置され、運営される
 - したがって、文書を利用することによって、利用者が費用を負担することはない
- (原則として) 機関内で作成された文書類を保存する
- 保存は電子的に行う
 - 電子的に保存された文書は、インターネットを経由して誰でも利用可能である

Clifford Lynchによる定義(2003)

a university-based institutional repository is a set of services that a university offers to the members of its community for the management and dissemination of digital materials created by the institution and its community members.

ie. Organizational commitment to stewardship of digital materials:

- organization

- access or distribution

- long-term preservation

ARL Bimonthly Report 226, February 2003

Institutional Repositories: Essential Infrastructure for Scholarship in the Digital Age

by Clifford A. Lynch, Executive Director, Coalition for Networked Information

大学がなんでそんなサービスを？

- 機関のアイデンティティの確立
 - なんととっても、大学は教育と研究が社会的使命
⇒ 研究と教育に関する社会的説明責任の履行
 - “RAE”・”QAA”的評価およびアクレディテーション的評価への対応
 - 歴史的アイデンティティの創造と継承
- 研究者にとっての研究インパクトの増進
- 教育者としての社会的責任
 - 教育は教材につきない
 - 大学の教材は生では売れない(OCWへの教訓)
- 大学資源の社会還元
 - 大学図書館の市民開放の延長

大学図書館だけが残る

- これからの社会は知識社会
 - 知識のライフサイクルの短命化
- ⇒ 生涯学習社会へ
- ⇒ 自分で学習できることの必要性(もちろん、支援は必要)
- ⇒ 今の日本の大学ではそのサービスを提供できない(学位授与機能のみ残る。それはそれで大事)
- ⇒ 18歳から24歳で学習習慣さえ身につけられれば、あとは「素材」があれば十分
- ⇒ それを提供し、支援するのが図書館！